

---

# アンノーン-unknown-

伊師神 獅雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンノーン - unknown -

### 【Nコード】

N6202Z

### 【作者名】

伊師神 獅雨

### 【あらすじ】

突如あるサイトに書き込まれた人類危機の予言。それから8年後のクリスマス、ネット上で1000万人の友人を持つ大学生、神谷祀裏は通り魔の脅威に脅かされていた。その正体を知った祀裏は驚愕の事実を知る。テロ、ウイルス、黒組織。ネットを駆使した非科学的で非現実的な世界が平行線と境界線の狭間に今、垣間見え始めた。

## 0001・X・mas（前書き）

最初の説明が少し長いので、飛ばして読んでいただいても結構です。

## 0001・X・mas

『Unknown』これが最終警告だ。人類はある脅威に脅かされている。状況はあまり．．．否かなりタチが悪い。特にこの約2年間は注意せよ。2035年12月～2037年1月。繰り返し、2035年12月～2037年1月。決して忘れるな。このメッセージは1週間後の2025年12月24日に自動消滅する。出所は調べても無駄だ、既に手筈<sup>てはず</sup>はついている。以上だ。』

この文面は一部ネット上で凄まじい話題を呼んだ。内容も勿論だが、記述通りに物事が進んだ事がその原因である。2035年からの2年間については不明だが、このアンノウンユーザーの出所は検索が不可能となっており、きっかり1週間後のクリスマススイブにメッセージは管理人の手を使わずして削除された。その後文献の搜索は続けられたが、完璧なる出所詳細の抹消<sup>まっしょう</sup>により捜査は中断された。

?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?

2033・12・24・Sat 20:38:19

世はクリスマス一色というのに、自分は大学生ながらバイトに明け暮れている。レジの横で税込み105円の品をドライヤーみたいな機械にかざすのが僕のクリスマス。

僕が子供の頃と何も変わらない世界。急激な発展を手にした日本はその衰えが始まるのも急激的なものだった。20年前からこの日本は．．．日本だけじゃない、世界は止まってしまっている。テレポーターもタイムマシンも空飛ぶ車も猫型ロボットも、何一つこの世界には存在しない。進歩するのはネットの世界だけだ。2010年頃から注目されているソーシャルメディアサービス。世界の誰とでも話せたり遊べたりできるという美点を認められ、今も人類を一つの大きな家族にするため大きな注目と脚光を浴びている。

さえないクリスマスをもた僕もこのソーシャルメディアとともに過  
ごしているのだ。

[illegible]

ケータイの音だ。僕の友人が、僕を求めてる音。僕を必要とする音。僕を呼んでいる音。

「おい、仕事中はケータイの使用はだめだろ。社会の常識だぞ」

「すいません先輩。友達がうるさくて」

「モリモリ」

8年前、あのメッセージが現れてからというものの携帯電話、パソコンの普及率は爆発的に上がったそう。たった一つの文を求めて、たくさんの方が何かに取り憑かれたように。というのはいくらなんでも大袈裟かもしれないが、それぐらいの社会現象へとなった。それと同時にメッセージが公表されたソーシャルメディアサイトの人気も爆発。炎上どころの話ではなかったようだ。そしてその人々の一人として挙げられるのは紛れもない、僕だ。

このメッセージに興味を持った人間は数少なくなかった。単なる厨二病患者が書き込んだ馬鹿げた文章で終わるはずだったが、政府、警察、専門家が全力で搜索した出所、身元が見つからない事を引き金に全世界の話題へと変貌していったのだ。僕はその事件と関連のある事件との相互関係を必死に追跡した。あのころの若い僕は12歳でありとあらゆるサイトに手を出し、この事件に関する情報を集めた。広めた。見た。感じた。考えた。そして。

「その結果がこのざまだよ……」

「なんか言っただか？」

「なんでもないっすよ」

「あつそ」

ケータイの画面には一つのアプリが開かれていた。友人帳というアプリだ。ネット上で知り合った人々の数を自動でカウントしてくれるアプリだ。出ている数字は【10007024名】。これは一体どういう冗談なんだ・・・。

? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ?

2033 . 12 . 25 . Sun 2 : 46 : 28

日にちも変わり夜も深まった頃、バイトの時間は終了し先輩と別れ自宅へ向かう。

2033 . 12 . 25 . Sun 3 : 07 : 11

自宅へ着いたのはバイトが終わりちょうど30分程度の時間だった。帰り際もらった店長の差し入れ（カップ麺）のビニールをピリと剥がし、お湯を沸かした。沸騰するまで時間があるのでネットを開く。寝る事が嫌いな人間というのは僕のような人なのだろうか。今日も特に愛用しているサイトを開き、友人を探る。

「だれかいるだろうか」

カチッ

「【アンドリユー】クリスマスイブはどうだったの（．．．？）」

「【@E】傷に塩をまぶすな」

「【アンドリユー】まぶしちゃうのかよ」

相変わらず馬鹿な会話だ。寒い外から帰ってきた僕にはぴったりな心温まる会話だ。

「【Alfred】さんがログインしました。」

「【Alfred】こん。湿気た会話してんな今日も」

「【@E】アルフ。最近見えないからどっか行っちゃったんじゃないかって」

「【Alfred】ああ、ここんとこシフトが入ってな」

ここで紹介しておこう。アンドリユーの本名は伊師神 いしがみ 紅樹 こうじ。中学からの幼なじみだ。当時ネットの影響で気がおかしくなっていた僕を更生させてくれた唯一の恩人だ。

そして@Eはネット上で知り合った人物で、口が少々悪いが女だ。そして生粋のバカだ。

『【アンドリユー】よかった．．．。連絡くれよ』  
『【Alfred】??お前らしくないな。そんなに心配してくれるなんて』

『【アンドリユー】べ、べつに心配なんかしてないんだからねっ』  
『【Alfred】いや可愛くねーよ。どこに萌えるんだよ。』

『【アンドリユー】というのは冗談で、本当に心配したよ。最近そこから“通り魔事件”起きてるから』

『【@E】バカッ、アンドリユー!!!』

『【アンドリユー】あ．．．．．す、すまん．．．。』

『【Alfred】んああ、大丈夫だよ。こっちこそ心配かけて悪かったな．．。』

話は変わるが僕の母親は僕が小学生のとき、目の前で通り魔に殺されている。

?・-・?・-・?・-・?・-・?・-・?・-・?・-・?

2025.12.17.Wed 20:50:00

僕はちよつと早いが、クリスマスプレゼントを母親と買いに来ていた。街中もまだ一週間前だというのにクリスマスムードがたちこめていた。カップルがあちこちに窺えたが、小学生の自分は興味もなかった。そのまま百貨店に向かうため歩き、交差点に差し掛かったところだった。【黒いアイツ】がやってきた。

【黒いアイツ】、あの無差別通り魔の事を僕はそう呼んでいる。向こうから走ってきたかと思えば、こちらに来るまでに刃物を女性2人、男性1人に刺し、僕の方めがけてやってきたのだ。もうダメだと思った瞬間、目の前に何かがかぶさった感覚があった。僕の、母だった。僕をかばい犠牲となったのだ。去年より早く降ってきた雪にはそぐわない真っ赤な血が滴り、母が倒れると同時に僕もヒザをついてしまった。声も出ず、涙腺もゆるまず、怒りも、悲しみも全部がかき消された瞬間だった。【黒いアイツ】が流れるように逃

走用の車に乗り込み逃げていくのには目もくれず、目もよこさず、  
その場で座り込んでいただけだった。

2025・12・17・Wed 21:00:00

母は目を閉じ、命を失った。そういえばちょうどネット上であの  
人類危機のメッセージが書き込まれた時刻だ。



0002・余興（前書き）

『でかこまれている会話はネット上のもの。  
「でかこまれているのは通常の会話です。」

0002 余興

2033 · 12 · 25 · Sun 13 : 20 : 55

p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

携帯の音だ。僕の友人たちが僕のサイト、ブログに書き込んでくると携帯が鳴るように設定されている。そのおかげでこのまま一日中寝てしまいそうだった自分を起こしてくれた。携帯を開く。特に重要なメッセージはなさそうだ。フライパンを出し、卵2個とベークンを数枚をその上に広げ、焼いていく。大学生の一人暮らしとして自炊は当然である。まあ至って簡単なものばかりだが。

2033 · 12 · 25 · Sun 16:49:23

p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
!!  
!!  
!!  
!!  
!!

またメッセージが届いた。しかしその内容は友人からのものではなかった。

『【Unknown】君は、神谷 かみたに 祀裏 まつりで間違いないか』

「あ……アンノーンユーザーっ!!!!!!!!!!!!!!」

いやしかしどうせ成りすましだろう。アンノーンと名乗れば誰でもなりきることができのだから。紅樹の悪戯か？ いたすら

【Alfred】さんがログインしました。

「【Alfred】なんだアンドリュ。冗談が下手になったんじゃないのか？」

p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

【Unknown】質問に答える。君は神谷 祀裏で間違いないか

なんだ、しづといな。今日は意地でもノってもらいたいらしい。

「【Alfred】まだやるか。わかったよ。はいはい僕は神谷祀裏で間違いありませんが何か？」

p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
!!  
!!  
!!  
!!

『【Unknown】8年前、君の母親は殺されているか聞きたい』

『【Alfred】おいおい、アンドリュー。冗談にも限度つても  
のがあるだろう！』

p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

『【Unknown】質問に答える。8年前、君の母親は殺されて  
いるか聞きたい』

「な、なんだよコイツ」

昨日はあんな素直に謝ったのに今日はどうしたんだ？まさか本当のアンノーンユーザーが……。

p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
p  
i  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

「【Unknown】早く答えろ、時間がない。君の母親は8年前の殺されているのか。」

「くっそ」

どうする、もし本当のアンノーンユーザーだったら……。

?  
|  
. - ? | . - ? | . - ? | . - ?

---

?

8年前の通り魔事件は僕が来ていた表参道以外にも、青山、銀座、原宿、代々木、秋葉原でも起きており。それがほぼ同時タイミングで発生し、犯人の全員が未だに捕まっていないのも重要性を物語っている。そしてもう一つ。あの人類危機を伝えるメッセージである。これも通り魔事件と同時に発生しており、関連性を持っている事はほぼ間違いないだろう。

これらの事から通り魔事件はメッセージ公布の余興だったといえる。これが現時点までいえる【死のクリスマスイブ】の全貌だ。

2033.12.25. Sunday 17:30:31

『【Alfred】確かに殺された。表参道、某百貨店前の交差点の俺の目の前で通り魔に殺された』

このメッセージを送ってからというものの返事はなかった。アンドリューや@Eにも確認したが二人ともアンnoonユーザーが送ってきた文面に見覚えはないらしい。やはりあのアンnoonユーザーは本物だったのだろうか。

2033・12・31・Sat 8:00:59

今年最後の朝はあまり目覚めがよくなかった。今日は紅樹ともう一人、幼稚園からの幼なじみの赤羽<sup>あかばね</sup>宮瑠美<sup>くるみ</sup>に除夜の鐘を聞きに行こうと誘われていたのだ。しかし集合が午前11時とはこちらもやはりバカなのだろうか。ひとまず食パンを焼き、コーンスープの素にお湯を注ぐと僕は腹いっぱいになっていた。

?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?

2033・12・31・Sat 11:05:27

「ゴメンゴメン、遅れちゃった」

「計画者が遅刻とはとんだご身分ですな」

「だからゴメンって言ってるでしょ、もう」

「そのへんにしとけて」

本当にこの二人は仲がいいのか悪いのかわからない。まあ小学生から同じで仲が悪いというのもおかしい話だが。

「んで? 計画者さん。今日はどこに行くんだ?」

「え? 除夜の鐘聞きに行くって言わなかったっけ?」

「いやそれはわかってる。夜までどこで時間を潰すのかって言うんだよ」

「.....いや特に」

「ノープランかよ!!!」

バカ仲間として@Eを紹介したいわ。二人の会話を聞いてみたいよホントに。にしてもなぜ集合場所が大学なんだ? なにかのフラグか?

「あ!!! 祀裏先輩!!!!」

報告：フラグは回収されました。

「またお前か、何の用だ？」

「ん？誰だこの小動物は」

「小動物じゃありません！！柳 真朱です！！祀裏先輩の後輩です！！」

いや祀裏先輩って言うてる時点でお前は僕の後輩だろ。

「かわいい後輩を持つてたんだね。1年生？」

いや僕たちが2年生の時点で後輩は1年生だけだろ。なんなんだ。女はバカ前提なのか？

「サインもらいに来たんです」

「またか、もういい加減にしろ」

「サイン？」

「ああ、僕が埼玉の大学とテニスの対抗試合があつて、そこで僕が優勝してからファンなんだつてよ」  
ダブルスだが。

「サインぐらい書いてあげなさいよ」

「いやサインなんて書けねーよ普通」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「俺書けるぞ」

「私も」

「ええ・・・・・・・・・・。」

なにそのまるでいつでもかっこいいサインが書けるように練習しているような厨二っぷりは・・。

「じゃあせめてアドレスくださいよ」

「・・・・・・・・まあそれくらいなら」

2033年12月31日11時20分22秒。ある程度かわいい後輩のアドレスを入手した。

「じゃあ、私はこれで」

「ああ。せいぜい通り魔に刺されないように気をつける」

「なんですかそのイヤミなセリフは」

そうして柳は立ち去っていった。

「久々に出たな」

「あ？」

「本当に心配しているときにしか言わない掛け言葉」

「別に心配してるとかそういうんじゃないんだからねっ」

「お前のツンデレも誰も得しねーよ」

今日一番のボケも軽くスルーされてしまったようだ。

?・ー・-?・ー・-?・ー・-?・ー・-?・ー・-?・ー・-?

2033・12・31・Sat 14:46:08

僕は泣いていた。この時刻。上を見上げた瞬間、蒼白な表情をして泣いた。叫んだ。なぜって？僕は預言者になってしまったからだ。僕の言った事が本当になってしまったからだ。あの後3人でやって来た街中の巨大モニターに映し出されていたのは。

柳 真朱が通り魔に刺されて死亡した現場だったからだ。

## 0003・Uメール

2033・12・31・Sat 16:10:45

その後僕らは除夜の鐘を聞きにいくことなく別れ、それぞれがそれぞれの家へ帰っていった。僕と宮瑠美は泣きに泣いた。周りの人が引くぐらい泣いた。紅樹は泣いていなかったが、心なしか誰か一人強くないといけないと思ったのだろう、その涙を強く握ったこぶしの中に押さえ込んでいるようにも見えた。今にも大声で叫びだしそうだった。でも泣く事はなかった。

「...強いなあ...」紅樹は...」  
pipipipipipi!!!!!!!

こんな気分じゃメッセージを見る気もなかった。僕らしくないな。どんなに忙しくても、眠くても、疲れていてもメッセージは一番に見ていたというのに。

しかし僕は25日の事を思い出した。アンnoonユーザーのメッセージだ。僕はこのメッセージを「Uメール」と呼んでいる。UnknownとUserの“U”を取って「Uメール」だ。

そしてその「Uメール」が今まさに届いたのではないかと僕は予想した。先日クリスマスプレゼントとして自分で自分に買ってあげたスマートフォンの画面を開き、内容を確認した。やはり予想通りだった。

「【Unknown】柳 真朱は今日、亜城台大学を出た後表参道の交差点で殺されたか聞きたい」

「くっそ、ナメやがってつつつつ!!!!!!!」

先週買ったばかりのスマートフォンを地面に叩きつけていた。無意識に。反射的に。2010年代のものとは違い、より壊れにくく機能性に優れているそのスマートフォンに外傷はなかった。しかし僕の心情はもう外傷だけでは済まなかった。すると急な嗚咽おえつに身まわれ、約2時間嘔吐感が止まなかった。

以前はしつこく答えを迫っていたアンnoonユーザーからの【メール】はもう来ていなかった。

? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ?

2034.1.7 Sat 08:01:21

あれからシヨックで一週間寝込んだ。気も安定し、嗚咽症状も見られなくなったため医師から大学へ行つていいとの許可を昨日もらつていた僕は今日から再び大学へと通う事にした。

「ま．．．．．祀裏!!!!!!」

「心配かけたな」

「大丈夫なのか。だいぶ苦しんでみたいだつて」

「誰から聞いたんだ？」

「@Eだよ。ずっと慰められてたんだろ？」

「ああ、だいぶ救われたよ。今日お礼言わなきゃな。お前も今日の23時にログインしてくれ」

「ん? いいが、俺が行く必要はないか？」

「ああ、お礼ともう一つ話したいことがあるんだ。ここじゃ話せない」

「?????」

「必ず来いよ。待つてるからな」

「わ、わかった」

「じゃあ僕実習あるから行くわ。また後で」

「おう」

こいつにはやはり話しておかなくてはいけない。アンnoonユーザーの事と【メール】の事を。今回の通り魔事件に関係してないわけないのだから。

? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ?



2034.1.7.Sat 23:00:00

『【アンドリユー】さんがログインしました。』

『【アンドリユー】来たぜ……って何だこの人数はっ！

！』

『ルーム8：9806名ログイン中』

『【Alfred】よし全員そろったな。これからはサイトの炎上を防ぐため発言は最小限にしてくれ』

1000万人から重要な友人を絞ってもやはりこれだけの人数になつてしまうのか。僕がまとめなければ。

『【Alfred】結論から言う。本物の【Unknown】からメッセージが来た』

『【ab - 阿修羅】ノシ』

『【Alfred】何だ』

『【ab - 阿修羅】なぜ本物とわかる？』

『【Alfred】僕の名前。そして母が殺された事を知っていた』

『【ターンエー】誰かが成りすましてるんじゃないのか』

『【Alfred】僕の本名を知っているのはアルフレッドだけだ。

』

『【@E】外部から来てないの？』

『【Alfred】このサイトは同じユーザー名が被っていると登録できない』

『【mwmwmwm】そんで？』

『【Alfred】本題だ。Unknownユーザーの正体と先日起こった通り魔事件の犯人を探してほしい』

こんなの誰も協力してくれないだろうと思っていた。でも結束は力へと変わった。全員が了解の返信をくれたからだ。9806通の了解の返信。涙がこぼれそうだった。良い友を持つものとは言うが良い友が集まればどうなるのだろう。そんな事を考えているだけで心が晴れた。挫ける必要はない。後は進むだけだ。みんなが僕の背中を押してくれる。これが一週間決意を固めた結果だった。ドッキリ

でいうところの【大成功】ってやつだ。

『【Alfred】みんな、無理はするな』

? | ・ - ? | ・ - ? | ・ - ? | ・ - ? | ・ - ? | ・ - ?

2034.1.10.Tue 10:18:44

アホみたいに天気の良い朝だ。あれからいくつか情報は来たがこれといって重要な情報はなかった。柳 真朱の葬儀は身内だけで行われたそうだ。

今日の予定としては赤羽 宮瑠美とショッピングモールに行く事ぐらいだった。紅樹も来る予定だったが、サークルに呼ばれてしまったようだ。陸上サークルなためスケジュールも過密極まりないと  
の事。

しかしそれを聞いて心配になってきてしまった事がある。いくら幼なじみといっても女性と二人でお出掛けなど、どこからどうみても【デート】ではないか。昨夜の僕は半乱狂、半混乱、半錯乱状態だった。

2034.1.9.Mon 23:00:31 (昨夜)

『【Alfred】た、助けてくれ.....@E』

『@E』どしたアルフ。まるで明日、決して彼女でもない幼なじみと二人で出かけるのだが妙に緊張してしまい自分で勝手に【デート】だと思い込んでしまっているためひどく混乱しているような口ぶりだな』

『【Alfred】いやその通りです。一瞬超能力者かと思っちゃうくらい見事な推察です』

『@E』んで、幼なじみってのは例の宮瑠美ちゃんか?』

『【Alfred】ああ。』

『@E』いずこへ?』

『【Alfred】川崎ラゾーナだ』

「【@E】 109シネマズで映画鑑賞後、下階でそれぞれの洋服を買った後、うな井でも食べてゲーセン行って時間余ったら近辺のカラオケにでも行って公園でラブラブして帰りんしゃい」

「【Alfred】何その楽しくないわけないデートプランはっ！彼氏いないよね？！てか公園は余計だよ！？」

「【@E】恋したいけどできない女の方が妄想力に長けているのだよ」

「【Alfred】いや別に威張れないけどね！？」

「【@E】手を無理やりつなぐな、会話を途切れさすな、いつもどおり接しろ。俺から言えるのはそれだけだ」

「【@E】さんがログアウトしました。」

なんだその捨て台詞みたいなの、めっちゃかつこいいんですけど。てか“俺”つつたる最後。情に入りすぎだろ。

2034.1.10.Tue 8:45:00

決戦のときだ。

## 0004・フラゲ

2034・1・10・Tue 9:00:01

「あつ、おい。祀裏」

「っ！あ、おお」

「ゴメン待った？」

「お、あ、い、今来たところだ」

1時間前からスタンバってました。

「そう、じゃあ行こうか」

「お、おお」

宮瑠美は楽しそうにスタスタと歩いていった。後ろ姿に思わず見とれてしまった。にしても宮瑠美の私服、なんかいつもより気合入ってないか？い、いや今日はあくまで【友人】とお出掛けなのだ。そんなはずはない。

「遅いよ、祀裏！映画始まっちゃうよ！！」

残念ながらその心配の必要はない、映画開始の1時間前に集合をかけたのだから。今日はなんとしても宮瑠美を楽しませなければならぬ。徹夜で会話も考えてきたんだ！！

「あ、わ、ゴメン。ところでその服可愛いなっ！！！」

「え？」

うわっしまったあ。焦りすぎて全く関係ない時に関係ないこと言っちゃったよ……。しかも朝の通勤時間で人も多いのになんかでかい声で言っちゃったよ。どうすんだよこれ。なにがところだよ。気まずすぎるよ。

「あ、その、いや……………」

自分自身のフォローも出来ないのかよ。

「……………」

「す、すまんいきなり大声……………」

「ありがとう」

「え？」

あ、ありがとう？蟻が十？有難う？

「今日は気合入れてきたんだあ。久しぶりに祀裏とふたりで【デート】だもんね」

なんだ、やっぱ気合入れて来たんだ………ん？【デート】？

「早く、行くよ？」

「え、ああ」

なんだか今日は宮瑠美が世界で一番可愛くみえる。気のせいだろうか……。

? I . - ? I . - ? I . - ? I . - ? I . - ? I . - ?

2034 . 1 . 10 . Tue 21 : 30 : 42

「今日は楽しかった。ありがとう」

「そ、それはよかった」

「まさか祀裏がYUI歌うとはねえ。おどろき桃の木山椒の木だよ」

「そのネタかなり古くないか？」

「え？うそ？紅樹はいまがトレンドだって言ってたよ」

あいつ、また余計な事を吹き込みやがって……。

「じゃあ、ここで。私、南武線だから」

「ああ、じゃな」

「また今度遊ぼうね」

「ああまた」

フラグみたいなセリフを吐きやがる。

………フラグ。

「………通り魔に刺されないように気をつけろよ………」

「」

「っ………ま、まで！」

「……宮瑠美………」



2034・1・10・Tue 23:39:11

「家にまで送ってもらって、ありがとう。電車の事は驚いたけど、嬉しかった」

「ああ」

「また遊びに行こうなんていわないよ」

「え？」

「これからずっと遊んでいよう」

「……………お前らしいな」

「もう、馬鹿にしてんの？」

「いや。こっちこそありがとう。元気でした」

「よかった。そんじゃね」

「ああ」

家の扉がしまるまで僕は彼女を見守っていた。これで安心して家に帰れる。そう感じて一歩踏み出した瞬間だった。

「神谷 祀裏だな。来てもらうぞ」

「っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

銃口が背中に突きつけられていた。

?・!・-?・!・-?・!・-?・!・-?・!・-?・!・-?・!・-?

片手銃を持った小柄な男1人とジャクナイフを所持した大柄な男が1人。以前空手と合気道をかじってたとはいえ2人は厳しい。せめてこの小柄な男が怯めば。

「目的は何だ」

「お前のIDだ」

「正確には僕の【フレンド】じゃないのか？」

「その通りだ。1000万人の人間を手玉に取るような奴はお前ぐらしいじゃないからなあ」

「手玉？」

「あ？」

「怯んだ！！！！」

「僕の友人を手玉呼ばわりするなあああああ！！！！！！！！！！」

足のかかとで背後の男の手を蹴り上げる。案の定片手銃は空中へ飛ぶ。

「何！？」

男が上を見た。大柄の男も上を見てる。

「よっ」

あまりに小癪こじやくだが、上を見上げ走り出した小柄の男に足を掛け転ばせる。

「いい転びだwww」

「くっ、生意気な小僧があ！！」

「しまっ・・・」

僕も足を掛けられ転倒。後ろからは大柄な男。切り替えて構える。

「素手で挑むか、いい度胸だ」

とつくに銃は地面に着き小柄な男が取りに行く。こいつを相手にしてる時間がない。大柄な男がこちらに向かってきた。構えが素人。特に訓練は受けてなさそうだ。すかさず避け、背中を突く。うつぶせに倒れる男。

「今のうちに・・・・・・つく！！！！！！」

「残念だったな。人数の勝ちだ」

しまった。遅すぎたか。

「それはどうかな」

銃声。小柄な男の手から銃が吹き飛ぶ。上から聞こえた。屋根かつ！！

「君がアルフレッドか。お初に御目にかかりますねえ」

「誰だ」

「阿修羅と申します。以後お見知りおきを」



阿修羅．．．．【a b - 阿修羅】か！！

「アルフレッドだ。助けてくれ」

「お望みどおりに．．．．．」

2034.1.11.Wed 0:20:32

「そのジャックナイフ！！」

「くっ」

「後はお前だけだ。抵抗するなら容赦はせんぞ？」

「チッ、神谷祀裏。お前は常にUnknownの射程だ。逃げ場などないからな」

「僕が自らその道を選んだ。言われなくても理解済だ」

そついうと男は走り去っていった。誰も後を追わず、追いかけず闇へと消えていった。

2034・1・11・0・45・40

大柄な男は去っていった。そして残るはこちらの小柄な男。気絶している。

「この男は私がつれていきます、あなたにもちよっと着いて来てもらいますよ」

「構わないよ」

そういうと阿修羅は人を連れ去る盗賊のように男を肩に担ぎ上げた。「!!!!!!」

「ど、どうした？」

担ぎ上げた瞬間阿修羅の顔は驚愕したようになった。そして男をおろすと服を一枚脱がし始めたのだ。すると僕もさすがに気付いた。

「お、女?!」

「ええ、担いだ瞬間胸があることに気付きました。どうりで小柄なわけです」

暗かったため今まで気付かなかったが、小柄な男だと思っていたこいつは紛れもない女性だったのだ。声は極めて精巧なボイスチェンジャーで男声へと変えていたのだ。

「でもなんで声を変えてまで男になりましたんだ？」

「女だとわかると力の差で圧倒的に勝てると相手に知られてしまうからです。よくある手口です」

阿修羅は再び担ぎ上げると歩いていった、僕もそれについていく。

「にしても大学生だとは驚きです。あの友人の数、それなりの企業家かと思いましたか」

「期待にそぐわなくてすまないね。そっちこそ同い年かと思ったら立派な男性で驚きだ」

あのサイトは個人情報トップシークレットとしているため実際に会うか自ら説明しない限り人物像がわからないのだ。

「で、これからどこに行くんだ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6202z/>

---

アンノーン-unknown-

2011年12月25日15時48分発行